

# ジオホストプログラム

矢島淳吉<sup>1)</sup>・遠藤祐二<sup>2)</sup>

## プログラムの設定と募集

第28回 IGC では、Geohost and Travel Grant Programs を設けて、発展途上国からの会議参加者への財政援助を行った。同様の趣旨のプログラムを第29回 IGC でも実施することは準備段階から検討されており、第4回組織委員会(1990年1月)においてジオホスト小委員会の設置が正式に決定され、藤井敬三委員長(地質調査所国際協力室長・当時)の下に活動を行うことになった。

プログラムの実施はファースト・サーキュラー(1990年3月)で予告された後、援助内容を小委員会で検討し、組織委員会の承認を得てセカンド・サーキュラー(1991年4月)に掲載、募集を開始した。その内容は(1)会議登録料の免除、(2)無料宿泊施設の提供、(3)本会議に併設される有料行事(巡検等)の参加料補助、(4)参加に要する旅費の支給のいずれかとし、複数項希望者は優先順位を明記するよう指示した。対象は発展途上国の研究者で、年齢、所属等にはとらわれないこととした。

応募フォームは6月下旬から事務局に届き始め、その数は日を追うにつれ予想をはるかに上回るペースで増大していった。

## 国際選考委員会

第28回 IGC の例にならい、援助対象者の選抜を行うために、国際組織の代表者で構成する選考委員会を設けることとした。国際地質科学連合(IUGS)、国際開発地質科学者委員会(AGID)、国連教育科学文化機関(UNESCO)、第28回及び第29回万国地質学会議組織委員会(28-IGC, 29-IGC)の各代表者に推薦を依頼した結果、R. A. Price・S. M. Castro (IUGS)、Wang Sijing (AGID)、E.

Dudich (UNESCO)、B. B. Hanshaw (28-IGC)、佐藤正・石原舜三・久城育夫(29-IGC)の8氏による国際選考委員会が発足した。

## 財 源

プログラムの財源として、当初は第28回 IGC に供出された UNESCO からの5万ドルと同額が期待されていた。しかしながら、UNESCO 側の事情により、第29回 IGC には旅費として1万ドルしか供出できないと1991年9月に連絡してきた。この事態を受けて、組織委員会では日本側の予算から旅費として1万ドルを拠出すること、及び新たに日本 IGC 基金制度を設けて、登録料と宿泊費を援助することを決定した。これにより、旅費2万ドル、滞在費等約3千万円をもって本プログラムを運営する方針が固められた。同時に、国際選考委員会には旅費支給者のみの選抜を依頼し、日本 IGC 基金制度による援助者は国内委員会を設けて選考することとした。

## 選考経過

プログラムへの応募締切は1991年10月1日であったが、期日を過ぎても連日到着する応募フォームは途切れなかった。締切日ですでに応募は700件を超えていたが、郵便事情等も考慮し、10月末日までを有効とした結果、総数は79ヶ国から976件に達した。それ以後の到着は無効としたものの、更に300件を越す申込が翌年3月頃まで続いた。

1991年10月、藤井国際室長の静岡大学転出に伴い、ジオホスト小委員長は一時後任の花岡尚之室長に引き継がれたが、11月からは矢島がその任に就くこととなった。

キーワード：IGC、ジオホスト小委員会

1) 地質調査所 鉱物資源部；ジオホスト委員長

2) 地質調査所 国際協力室



写真1 ジオホスト歓迎パーティー会場の筆者ら，中央右側矢島，左遠藤。

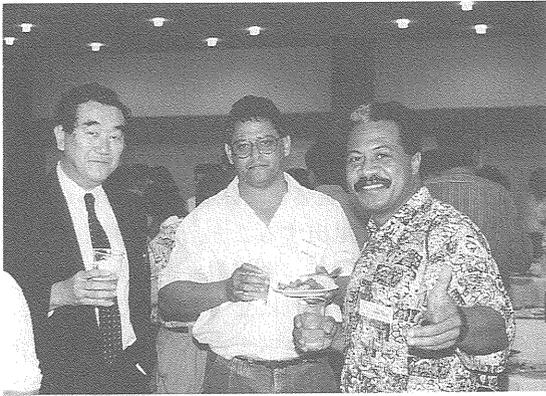


写真2 ジオホスト歓迎パーティー会場で，左から嶋崎吉彦財務局長，南太平洋からの A. Simpson, F. Kitekeiaho 両氏。

さて，1000件近い応募者の中から援助者を選考する作業を進めなければならない。財政的にも時間的にも，国際選考委員を一堂に集めて審査してもらう余裕はない。また，全員の応募フォームとアブストラクトをコピーして選考委員へ送るのも無駄に思われた。そこで，いくつかの基準を設けて，機械的な予備審査を行った。すなわち，フォーム記載の不完全な者，先進国からの応募者はこの段階で不採択となった。また，できるだけ多くの国から参加者を募る意味から，応募国あたり最低1名は残すようにし，一方多数の応募者があった国に対しては，募集の趣旨には反するが，若手研究者を優先した。この作業方針は各選考委員の支持を得た。このようにして，約300名の候補者が選び出された。

次に旅費の支給者を決めなければならない。地域の片寄りを避けるため，予算額2万ドルを4分割

し，アジア，中近東・東欧，アフリカ及び中南米の4地域に5千ドル宛振り分けることにした。一方，候補に残った者の中から旅費の支給だけを希望している33名を抜き出し，その書類一式のコピーを選考委員に送り，先の4地域の中での優先順位を付けてもらうこととした。各委員からの評定を単純合計して，各地域における順位を決め，地域毎に見積られたエコノミー往復料金の半額支給を目安に，13名の旅費支給者が決定したのは12月の中旬であった。残る20名はキャンセル待ちとしたが，結果的には辞退者は出ず，13名全てが会議に参加した。第28回 IGC では，旅費を受け取ったまま，参加しなかった者もいた，と聞いていたので，会場で13名全員が登録を済ませた時は，担当者一同，ほっと胸をなでおろした。

## 日本 IGC 基金制度

この制度による援助は，(1)登録料の免除，(2)無料宿舍の提供，(3)食費の支給(1日2千円)の3種とし，旅費支給者も含めて全ての対象者に一律に適用することとした。募集要綱にあった巡検等に対する補助は，希望者が少なかったこともあって，行わないことにした。

予備審査に通った約300名を再度見直して選考を行い，適用者を65ヶ国298名とした。急抛選考する必要があり，事務局に応募書類があることから選考委員は石原舜三(事務総長)，井上英二(募金委)，本座栄一(事務局長)，矢島淳吉・遠藤祐二(ジオホスト委)の5名として了解をいただいた。

## 応募者への連絡

予備選考の後(12月初旬)，落選者及び締切後の応募者に対する不採択通知の郵送が始まった。次いで旅費支給内定者及びその補欠，最後に日本 IGC 基金による援助候補者と続き，一通りの連絡が終わったのは1992年1月に入っていた。この間，依然として続く応募フォームに混じって，落選者の多くから再考を求める手紙が届き始めた。この手の内容は泣き落としから売り込み，果ては恫喝に近いもので一般に長文で，読むだけでも時間を取られ，大いに消耗させられた。

次に旅費支給者への送金を行った。UNESCO

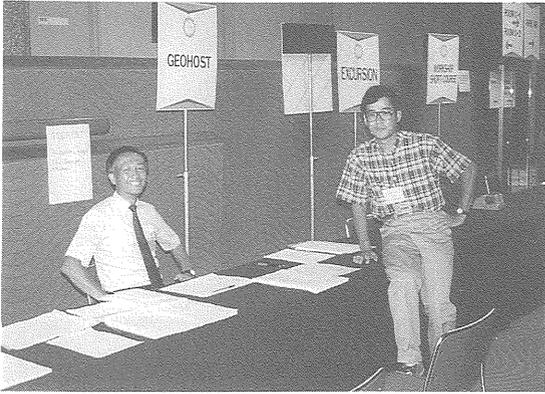


写真3 ジオホスト受付デスク。左から小笠原正継，奥村晃史両氏。

からの1万ドルはジャカルタにある東南アジア地域事務所経由で財務局に振り込まれた。各候補者への銀行口座問い合わせ、振込(一部小切手)、受取り確認と一連の作業は、財務局の協力も得て、比較的スムーズに進行した。この時点で、20名の補欠にはキャンセルなしの連絡を出したが、かなり期待を持っていた研究者が多かったらしく、このグループから10名の不参加者を出してしまう結果となった。

一方、援助者への宿舎の確保が次の重要な作業となった。この点では西村進会場委員長を中心とする京都大学の関係者の方々に絶大なご協力を頂いた。京都市内の各種共済関係の宿泊施設が、会場委の手で確保され、本プログラムによる参加者の利用に供された。援助候補者のうち、旅費支給者が僅少であることもあって、実際何人の参加者があるのかギリギリまで読み切れず、部屋割を急ぐ会場委には多大の迷惑をおかけする結果となった。会期も迫り、最終的には11の宿泊施設に約300のベットを割り振り、候補者への宿泊案内を発送した時はもう8月の声を聞いていた。

## 会期中

本プログラムによる登録受付は、8月24・25の両日は会場メインホールの一隅に置かれた(写真3)。大半の登録がこの両日で片付いたため、26日以降は受付を本内部に移した。受付では、名前と京都滞在日数を聞いて、日数に応じた食費を支給した。食費は通知の段階では、1日2千円としていたが、日本の物価を考えれば不足ではないかとの声も多く、

会期直前になって3千円に値上げすることが決まった。この増額を知らずに会場にきた参加者は当然のことながら大喜びであった。一方、そのために予算は予定以上に膨らみ、この時点でキャンセル分の補充は、候補リストから17名だけ受け入れた。

ここで一つ心暖まるエピソードを紹介しておこう。開会早々に登録を済ませ、10日分の食費を受け取っていた1人の若い研究者が2日後事務局を訪れ、「急用ができて国に帰らねばならなくなった。」と言いつつ、残りの日数分の食費を返却に来たのであった。感謝の言葉と共に彼が去った後、居合わせた一同胸にジーンと来るものを噛みしめた。

ジオホスト委員会では、財務局とも相談の上、これ以上欠員が生じても会期中の補欠は行わず、可能な限り宿舎の予約の方をキャンセルさせて、ただでさえ膨れ上がっていた予算を抑えることにした。事実、不参加者を当て込んで援助を求める参加者が連日のように訪れたが、全て丁重にお引き取りを願った。

8月31日の夜、本プログラムによる参加者と京都周辺に学び本会議の運営に協力している海外の留学生を招いて、組織委員会主催のレセプションが持たれ、若手・中堅研究者の交歓の場となった。(写真1, 2)

## 結 び

第29回 IGC におけるジオホスト・プログラムには1300名を超える申込があった。日本 IGC 基金制度も加えて、298名の援助候補が選ばれたが、26名から不参加の連絡が入り、63名が連絡の無いままに現れなかった。

最終的に本プログラムによる参加者は、29名の女性研究者を含む226名で、対象国(地域)は43であった。この参加者数は総登録者数の約5%、また援助対象とした途上国からの登録者数の約23%に相当する。

本プログラムの実施は総じて好評を持って迎えられたと言えよう。レセプションの席で寄せられた参加者からの感謝の声は、あながちお世辞だけではなかったように感じられた。